

## 第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

### 小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	若狭町立気山小学校
コース	学校支援コース
活動・研究のテーマ	ふるさとを愛し、ふるさとに愛される気山っ子の育成

#### 〈活動・研究の意義および活動報告〉

##### ◆活動・研究の目的

本校は、全校児童が60名の小規模校である。素直で優しくまじめな児童が多い。一方で、世界の変化に対応していくのに必要な、物事に対して主体的に考えて実行する力や自分の考えを論理立てて表現する力が課題である。自然豊かなふるさとの良さや課題を知り、ふるさとへの思いを発信する活動を中心に、主体性や論理的思考力、表現力を育みたいと考え、本研究を実施することとした。

##### ◆活動内容

1 対象者 全校児童60名 1年（5名）、2年（11名）、3年（9名）、4年（10名）、5年（13名）、6年（10名）、特別支援学級（2名）

2 教科等 生活科と総合的な学習の時間を中心とした全ての教科

##### 3 ねらい

基礎基本を身につけ、ふるさと気山を愛する気持ちを持ち、周りの人とよりよく関わりながらふるさとの人から愛される中で、これからの時代を主体的に生き抜くために必要な資質能力を育む。

##### 4 具体的な活動内容

本活動の特色は、気山地区ならではの自然とそれに関係する人々を、学びの中心に置いたところにある。本校は豊かな自然に恵まれ、校区にはラムサール条約湿地に登録された湖や、絶滅危惧種などの貴重な生き物が生息する場所もある。また、これらの自然環境を保全することや研究を行っている人や機関もある。今年度は本補助金を活用し、豊かな自然環境を題材に外部や地域の人・機関とかかわりながら、米作り体験、「水晶山」登山、「レインボーライン」たんけん、ウナギ漁体験などを行った。

同時に日々の教科の学習においても、学びを整理、発信するために必要な基礎基本的な力を育んできた。最終的には、学んだことや自分の思い、自然環境を持続するための未来につながる提案などをまとめ、「学習発表会」で地域や家庭に発信したり、他校との交流で発信したりした。

上記の一連の学習展開を通して、ふるさと気山の自然の素晴らしさと、そこに住む人達の温かさや思いに触れる中で、ふるさとを大切に思う心を育むことができた。

また、児童達が自分の思いを持ち主体的に学んでいく姿が見られたと同時に、情報の収集、整理、分析、まとめといった総合的な力をつけることもできた。

## ① 生活・総合的な学習の時間を軸とした取組（全学年、生活・総合的な学習の時間）【期間：9月～2月】

### 1・2年生

1・2年生は「気山ヨイヨイお宝さがし」と題して、気山小の児童達が10年前に作った「気山小ヨイヨイ音頭」に出てくる地域の宝について、「そこはどこ?」「いつてみたい!」「食べてみたい!」との思いを大切にしながら、水晶山登山、レインボーラインたんけん、カヤ田での自然観察などを行った。地域の方にお世話になってもらって特産の梅をジュースやジャムにし、そのジャムを使ったお菓子の作り方を地域の洋菓子店の方に教えていただく体験も行った。

地域の自然を知るだけでなく、地域の方にお世話になりながら地域を楽しむ活動は、ふるさとの「人」の温かさや思いにふれる活動でもある。その中で児童は、ふるさとを大切に思う気持ちを育てていった。

2月の学習発表会では、これまで楽しんできた「気山のお宝」を家族や地域の方に紹介した。家族にも地域の良さを再発見してもらおうよい機会となった。生活科だけではなく、音楽、国語の学習とも関連付け、教科横断的に学ぶこともできた。

### 3・4年生

3・4年生は、気山地区に見られ学校に営巣もする「コシアカツバメ」の観察や、地域を流れる「宇波西川」の生き物観察を行った。その際は、「里山里海湖研究所」をはじめとする地域の専門家にお世話になり観察学習を進めた。

3・4年生は学習を進める上で「比較」を大切にされた。本校と同じく「コシアカツバメ」を観察する他校との交流を通して気山地区のコシアカツバメの様子と比較することや数年前の様子と比較することで、児童からは「さらに詳しく調べたい!」「なぜだろう?」という問いが生まれた。また、宇波西川の上流・中流・下流のそれぞれで見られた生き物を比較する中で発見したことも多かった。

これらの学びを、「CM作り」と「学習発表会でのグループ発表」という形で発信した。「CM作り」では、自分達の伝えたいことをいかに短くインパクトを持って伝えるか、写真や動画をいかに効果的に使用するかをグループで話し合っけてまとめた。学習発表会に向けては、低学年にも伝わりやすいようにクイズ形式にしたりミニ劇を入れたりして発信方法を工夫しながら相手意識を持ってまとめることができた。

### 5年生

5年生の総合的な学習の時間では、米作り体験を行い、「ご飯のおとも」としておすすめの料理を地域の食材から開発していった。地場産食材の良さをより理解するため、地域の特産である梅は役場の方に教えていただいて梅干しにし、地域の漁業組合の方にお世話になりウナギ漁体験なども行った。そして、体験を通して学んできた地域の特産品を使ったおにぎりを開発し、地域の「食物科」高校生のアドバイスを受けながらよりよいものに仕上げた。一貫して地域の様々な方々とつながりながら学んでいく中で、ふるさとへの思いを育てていった。また、自分達なりのおすすめのおにぎりを考えていくことは、学んだことを生かして提案するよい機会ともなった。

### 6年生

6年生は、これまで学んできた地域の自然やその良さについて振り返り、自分達でテーマを決めて調べ学習を行った。調べる中で出てきた疑問はお家の方に聞いたり専門機関に聞いたりして追究していった。

低・中学年からの「ふるさと学習」を土台に、自分達なりに課題意識を持って学ぶことで、ふるさとへの思いを再考することができた。自分達でまとめ発信する中で、プレゼンテーションの力をつけることもできた。

## ② 日々の教科の学習において基礎基本を育む取組（全学年、全ての教科）【期間：9月～3月】

本校児童の学びに関する困り感や学び方の得手不得手には、多様性がある。特性に応じた個別の支援を必要とする児童も存在する。全ての児童の「わかった!」「楽しい!」学びのために、本補助金で得た75型液晶テレビ、プリンター、天板拡張くん等を児童に合った形で活用し、基礎基本の力を育ててきた。

また、ふるさと学習での学びをまとめる際には、3年生以上はロイロノートを使ってグループで考えを出し合った。グループの考えを75液晶テレビにうつして共有・比較したり、児童自身が使用できるプリンターで資料等を印刷してまとめていたり、児童が主体的に学ぶ上で非常に有効に活用することができた。

## 5 見られた成果

上記の取組により、主に3点の成果が見られた。

- ◆児童の意欲や疑問を引き出す学習展開により、主体的に学びに向かう児童の姿が見られた。
- ◆基礎基本の力を育むと共に、高学年では、情報の収集、整理、分析、まとめといった総合的な力をつけることもできた。
- ◆児童自身が今後たくましく生きていく上で基盤となる、ふるさとへの愛やふるさとに関わる人とのよりよい人間関係が育まれた。

しかし、「活動」は充実していたが、そこからの「探究」という面では少し弱い。児童の疑問をより追究していくこと、ふるさとのよさだけでなく「課題」にも目を向けること、活動自体の精選等が今後の課題である。